



モノレール

たび重なる神籤引きに縁起わるさを覚えるよりも

祈り多き己の力なさに自戒の楔を打ち続け

決して他力をのぞむわけではなく

掌の孤独と身近な物事すべてに対する憐れみに重きを置き

流れる汗に自我を忘れよ

流す涙に他者を想えよ

世界は狭くて広い

地球は重くも持ち上がらん

心のままに宇宙を駆け巡って

すべて全てに還りめぐるまま

何度でも生まれ続ける

たとえ道筋が一つしか見えなくとも

(2014/8/13)

四十三歳のリアルゴールド

疲れていても眠れずに

ドリンク剤では胃が痛み

トイレの前で立ちくらみ

目薬さすと頭痛がし

何もない白いベッドの上

転がるだけの腰痛と

震えるだけのこむらがえり

苦笑いだけで唇から血が滲む

奴が捨てた地図は何処だ

どこにでもある自販機の前

鋼いろの電線をおおぐ

(2014/9/30)



日々は磨り減る果実の甘皮

雲だけの空は何時しか落ち

樹皮の滴りは境内を波立て

春は深いえぐりの川を思い

やがて静かに消えゆく粒子

答えも何もない砂利の一粒

お腹もすけば喉もかわく日

誰彼全ての為のように君を

忘れていたかのようにまた

思い起こしては安堵し続け

つつみ無き川のまま

偽れぬ心のまま

涙も語れず

桜落ちゆく黒い水溜まり

抱えた遺影の軽さに

硝子は無表情

最後の言葉も何もなく

光も風もただすり抜ける

いつしかの地図は時の迷路

開けたり閉じたりのを往く

旅にたとえるか

暦の渡りとするか

おまえ以外に分かるものもおらず

刻一刻の足音も無意味で

秒針の奇跡などは起こらず

熱のない緑の直中にたたずめ

俺は桜の淡いろを回避し

何も語れぬ水の上に手をかざすよう

力なく思うだけの午後

振り返ることも出来ずに

去来するものの端にすがりつ

意味を捨てて戒めるように

ゆるすように靴底をすり減らす

川はどこまで流れていくのか

知っているようで何も知らず

気づく前から流れていただけ



(2014/4/6)

遺品に紛れ込んだヒトカケラ

紫のアイポッドには未知の選曲

知らないように知ってるように

目を閉じたまま聴き泳ぐ

時間とは無縁のような歌声

誰かの為に声をあげ

自分のために充電する深夜

永遠とは名ばかりだが

勝手に拝借し続けると決めた

(2014/5/23)

夏座

軽い目眩で椅子に座り

重い身体で夜明けを待つ

流線の高速道路を走査する

夏の風域は遥かの雲向こう

ただ押し黙り日記を読み返す

目薬のようなシールは後追い

美術館の前庭に日向干し

かすかな眼球の花火に浸る

(2014/8/10)



何も無ければ草原のままだった地に

駅ができ道路が走りマンションが建ち

巨大モールがどんと据えられ

大人の買い物客をすり抜けるように

子どもたちが駆け巡る

ペット売り場の幼犬は鳴き声もなし

メリーゴーランドの相場は遊園地の三分の一

スマホのサプライ品を気まぐれに触りつ

横目に着ぐるみが通り過ぎる風を覚え

隠れることなきかくれんぼの祖父母群

吹き抜け部の橋梁の中ほどに立ち

目を閉じてみれば

小波のような揺れとも言えなくもない微動

ここがお前の海とは言えぬも

何かが少しでも生まれるかもしれないなら

春が過ぎ梅雨に濡れそぼち

初夏にかかって草に熱が帯びる頃にも

幾度幾たび足をまた運ぶのだろう

(2014/5/6)

中空の歌



光も無く陰も無く

斜に構えたクレーン車の脇に佇む

雨ざらしの地塊の自然熱よ

砲丸投げの姿勢を見上げ

持ち上げられそうな低い雲海の

届きそうな速流れへ

掴むように挑むように

せきたてるままの鼓動にまばたき

振り向かず振り向かず

リズムを刻んで何処へでも旅立たんとなす

お前の御魂を何度も覚え

諳んじた言葉をいくつか繰り返す

光も無いし陰も無い

ただ喜望をめざす鳩の尾翼を追い

六月の水鏡に何回も泳ぎだす

誰から教わったわけでもない

中空の歌を口ずさむいま

「お前はどこででも生き続ける」

その歌を、うたい続ける

(2014/6/5)

秋分

断崖絶壁に立つことを思えば

腹はゆるみ摂理は循環する

だからエレベーターも怖いし

観覧車はもっと怖いが

地続きの山塊なら大丈夫かと思う

俺には天国は分からない

青空には畏怖も覚え親しみも覚え

近いのかどうかも不明

だからただ

歩き続けているならば



(2014/9/23)

誤りを正すがための呼吸をし

マイナーな名前のコーヒーをかく

ここは何処の広場か

曖昧な煙りの向こう側に時計を見やり

半歩さがり半歩さがりて夢を見ん

過ちは誤りなどではけしてなく

地曳きの広がりへ向かう

無限の翼

その空へと

(2014/9/26)

樹脈

<http://p.booklog.jp/book/91656>

著者：井上雅英

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tkmuchzw411/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91656>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91656>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ